

電子図書館サービスの新たな可能性 - 欧米の動向のレビューを中心に -
New possibility of digital library service. Focusing on review of the
European-American trend.

尾 城 孝 一

(抄録)

去る2003年6月14日(土)日本図書館協会会館で行われた、第12回大学図書館オープンカレッジ: What's Reference 24x7!? - デジタル・レファレンス・サービスの可能性 - での、講演記録である。

ただいまご紹介いただきました千葉大学附属図書館の尾城と申します。どうぞよろしくお願いたします。

お話に入る前に、大図研と私のかかわりについてお話ししたいと思いますけれども、実は今から20年くらい前かな、名古屋大学で図書館員としての仕事を始めたんですが、大図研の愛知支部に加入しました。支部の会合にもたしか2、3度参加したんですが、その後、会費を滞りまして、いつの間にか除名されてしまったと、そういう非常に不まじめな会員なんですが、それが今日こういうオープンカレッジというこいつ会にお招きいただきまして、本当に恐縮しているわけでありまして。

今日の私のお話ですが、「電子図書館サービスの新たな可能性」というテーマで、特に海外の大学図書館の動向と、それから日本の状況を比較しながらお話をしていきたいと思っております。

前置きといたしまして、日本の大学図書館における電子化というか、電子図書館化への歩みについて振り返ってみたいと思います。まず、図書館業務の電子化というのがありますが、1970年代に図書館にコンピュータが導入される。まず貸し出しとか、返却、それから受け入れ、支払い、そういったいわゆる図書館のハウスキーピングの業務の電子化が始まる。それから、1980年代になりますと、学術情報センターですね、今の国立情報学研究所を中心として、学術情報システム構想という、そういった全国的なプロジェクトが始まる。それで、学術情報センターを中心とした総合目録の形成というのが始まって、その総合目録に基づくILLシステムというのも全国規模で展開されるようになってくる。さらに90年代に入りますと、インターネットへの対応ということで、各図書館ホームページを立ち上げて、そこでOPACを公開する。その他のいろいろな図書館のサービス系の業務についてもだんだんとホームページ上で展開していくようになってくる。90年代には、もう一つその後の大学図書館における電子化というか、電子図書館に向けた取り組みにとっても非常に重要な答申というのが学術審議会から出されている。これも皆さんご存じだと思いますが、1996年に出されました、「大学図書館における電子図書館的機能の充実・強化について」という建議です。もう7年くらいたってしまっているんです、これが出てから。この建議に基づきまして、当時の文部省が幾つかの大学に対して電子図書館を推進するための予算措置を行うようになる。

具体的にその措置がなされた大学ですが、先導的な電子図書館プロジェクトとして、こういった6大学に予算が配られている。図書館情報大学を筑波大学に合併してしまったので、今は5大学です。それから、さらに2000年には、補正予算を使ってここに挙げておりますようなこういった10大学に電子図書館整備のための予算が配られるということになります。

現在までの電子図書館化の到達点というのを確認しておきたいと思っております。文部科学省が毎年実施している大学図書館実態調査というのがありますが、その一番新しい報告書のなかから大学図書館の電子化に関するデータというのを拾ってみますと、まず、一次情報

(原文情報)の電子化ということですが、これは国立大学の場合は、何らかの形で一次情報の電子化を行っている大学というのは大体半数以上、60%近くが何らかの形で一次情報の電子化を実施している。公立、私立もそれぞれ電子化を始めている図書館というのがぼちぼちあらわれている。全体で約25%の図書館が、紙媒体の資料の電子化に取りかかっている、そういう結果が出ております。

電子化の内訳なんです、この表を見ていただくとおわかりになると思うんですが、貴重書と、それから学内生産物、これの電子化というのが中心になっている。やはりどうしても電子化には著作権の壁というのがありまして、ですから著作権が切れている古典ですとか、あるいは歴史的な資料、それから比較的著作権処理がやりやすい、許諾が得やすい学内の生産物、この2種類に電子化の対象というのが限られているというか、集中しているようであります。

次に、電子ジャーナルの提供についてなんです、これについては現在のところ国立大学と、それから公立、私立との間でかなり差が出てしまっている。国立の場合ですと、大体9割以上の大学で電子ジャーナルへのアクセスを提供している。一方、公立・私立のほうは大体まだ30%にとどまっていると、こういった数字が出ております。

国立大学の場合なんです、これはもうご存じのように、ここ数年来、国立大学図書館協議会というのがありまして、その下に電子ジャーナル・タスクフォースという一元的な交渉窓口、と言っていいと思うんですが、そういう電子ジャーナルを導入するための窓口というのを設置して、そこが精力的に海外の出版社と交渉を行ってきた。それで、大学側にとって有利な契約条件というのを勝ち取ってきた。その結果、2001年から今年2003年にかけて国立大学における電子ジャーナル導入数というのは、大幅に増加しております。

この表なんです、これは有料の電子ジャーナルの導入タイトル数をあらわした表です。準タイトル数ではなくて、これは総タイトル数をあらわしたものです。2001年を見ていただくとわかると思うんですが、2001年ですと、1,000タイトル以上の電子ジャーナルを購入、購読して提供している大学というのは、わずかに9大学にすぎなかったわけです。それが、2003年、今年になると1,000タイトル以上を購入している大学というのは、何と82大学になっている。それから、3,000タイトル以上を購入している大学というの、全体の3割以上占めている。というわけで、少なくとも国立大学においては、この2、3年で電子ジャーナルの導入というのは、急速に進んだということができるとおもいます。

ということで、要するに紙媒体資料の電子化と、それから電子ジャーナルの導入、この2点については、これまでに確かにある一定の成果というのをあげてきた。電子図書館機能としてこの2点については、それなりの成果があがっている、これは言えるかと思いません。しかし、果たして大学図書館の電子図書館機能というのは、この2点だけでよいのか、今後さらにその機能を高度化するために何が必要になってくるのかという、そのあたりをこれから残りの時間を使って考えてみたいと思います。

その前に、まず図書館の基本的な機能について見ておきたいんですが、いろいろな考え方があろうと思うんですが、ここでは情報の発信者と、それから受信者をつなぐインターフェイスである、そういうふうにかんがえたいと思います。これまでの従来の紙の時代の図書館というのは、この図ですと左側の、情報発信者から、ある一定の選書方針に従って、紙の資料を購入する、受け入れる。そしてその目録をつくって、分類して、図書館に並べて保存する。一方、利用者は図書館という物理的な場所に出かけて行って、そこで資料を閲覧したり、探したり、読んだり、借りたり、あるいは複写したりとかすることができた。さらに自分の図書館にないものについては、ILLを通じて、その現物を取り寄せたりとか、あるいは雑誌の論文のコピーなんかも入手することができる。もちろんレファレンス・サービスなどの支援サービスも受けることができる。つまり、従来の図書館では、図書館という物理的な場所を中心として、その情報の発信者と、それから受信者をつなぐインターフェイスとして、十分とは言えないのかもしれませんが、それなりに機能してきた。

それが電子時代、インターネットの時代になるとどう変わるかという話なんです、まず資料については、これは情報の発信者、出版社とか、あるいは研究機関とか、政府機関、

それから個人のインターネット上のサイト上に蓄積される。もちろん図書館が独自に電子化した資料なんていうのは、それは電子情報が図書館に残るわけでありましたが、圧倒的多数の情報資料というのは、図書館の外部の世界、図書館の外部のインターネット上に蓄積されるようになる。利用者は基本的にインターネットを経由して図書館を素通りするような形で情報にアクセスできる。情報を入手できる。こうなると図書館というのは、いわば中抜きされることになってしまうわけでありまして、そうすると図書館不要論とか、こういった話が出てくるわけでありまして、図書館不要論に対抗するためには、どうしたらいいかということ、電子時代にふさわしい新たなインターフェースとしての付加価値サービスというのが必要になってくる。それがこれからの大学図書館に求められる電子図書館的機能というか、電子図書館サービスということになるのではないかと考えるわけでありまして。

さて、そういった新たな付加価値サービスというのは一体何かと、それを考えてみたいと思います。まず、情報の発信者サイドに立ったサービス、発信者側に立ったインターフェースとしては、紙媒体の資料の電子化という機能がある。それから、電子ジャーナルとか、データベース等のそういった電子的な情報資源を契約して、それを学内の利用者に提供する。いわゆるライセンスという機能が必要になってくる。先ほどお話ししてきたように、この2点についてはそれなりの成果というのをあげてきている。それからインターネット上に存在するいろいろなさまざまな情報資源のなかから、価値の高い有用な情報というのを選りすぐって、それに効率的にアクセスできるようにしてあげよう。そういうサービスがある。これはサブジェクト・ゲートウェイということになります。

さらに、自分の大学内の先生方や研究者の情報発信を支援する機能。これは学術機関リポジトリというものです。こうした発信者サイドに立った機能によって、いわゆる電子コンテンツ・コレクションというものが形成される。もちろんこれは紙のコレクションと違って、コンテンツ自体が図書館にあるとは限らない。先ほど申しましたように、コンテンツ自体は図書館の外にあることが多いんですが、こういう電子コンテンツ群というのができあがる。それに対するアクセスを支援するサービス群というのが、これが受信者サイドの付加価値サービスということになります。まず、こういったコンテンツに統合的にアクセスするための図書館ポータルというのが考えられる。そしてそのポータルを通じたアクセスを支援するための支援サービスとして、デジタル・レファレンスと、それからオンライン・チュートリアルというのがある。これからの電子図書館サービスの全体像というのを描くと、こういったイメージになるのかなという気がしております。

ただ、昨日この絵をもう一度つくづく眺めておりますと、重大な欠落が一つあることに気づきました。それは電子情報の保存です。このようするに電子コンテンツ群を保存していく機能というのが完全に抜け落ちてしまっている、欠落しているな。しかし、電子情報の保存の話をし始めると、もうこれはこれでとても1時間程度ではお話が足りないということで、それについては今日は省略させていただきたいと思います。また別の機会に改めてしかるべき先生をお招きしてお話していただくのがいいのかなと思います。ということで、紙の電子化と、それからライセンスの話を除いて、この五つの機能について順番に見ていきたいと思います。

最初に、サブジェクト・ゲートウェイの話ですが、これはもう皆さん既にご存じの方も多と思うんですが、Googleとか、Yahooといった、民間のサーチエンジンの欠点を補うために生まれたサービスでありまして、一言で言ってしまうと、ここに書いておりますように、ある分野のWeb上の情報資源のメタデータ・データベースをつくる。それに基づいて情報資源、ナビゲーション機能というのを提供する図書館サービスである。

サブジェクト・ゲートウェイの概念というのを絵にあらわしてみますと、まず、インターネット上のWebの情報空間にさまざまな情報をリソースが存在する。図書館員はその中から質の高いリソースというのを見つけ出してきて、それを評価し、そのメタデータをつかって、データベースに登録する。利用者は、このデータベースをキーワードで検索したりとか、あるいは主題の階層をたどってブラウジングしていく。それによって効率的に質の高いインターネット上の情報を探し出して、アクセスすることができる。

海外の図書館では、1990年代の半ばあたりからですかね、いろいろな分野におけるサブジェクト・ゲートウェイというのが構築されてきておりまして、現在では成熟した図書館サービスの一つとして定着してきている。ここに代表的なゲートウェイの例というのを三つほど挙げておきました。最初のINFOMINEというのは、これはアメリカのカリフォルニア大学を中心とする幾つかの大学図書館が共同で運営するゲートウェイである。ある分野に特定しているんじゃないくて、あらゆる主題をカバーしている、そういったサービスです。

それから、2点目のRDN(Resource Discovery Network)ですが、こちらはイギリスのやはり大学図書館が中心となったサービスでありまして、それぞれ幾つかの大学で主題を分担して、主題ごとのゲートウェイをつくる。それをまとめて統合検索できるような、そういったサービスというのを提供しております。

3点目のRenardusというのがあって、こちらはヨーロッパです。EUのプロジェクトなんですけど、ヨーロッパ各国のサブジェクト・ゲートウェイをZ39.50という検索プロトコールを使って横断検索できるようにしたシステムです。URLを挙げておきましたので、また後でごらんになっていただきたいと思います。

日本にも似たような事例というのが幾つかあります。東京大学の情報基盤センターが提供しているインターネット学術情報インデックス、これも最近では有名になってきているので、皆さんももう既にごらんになった方がいらっしゃるかと思いますが。これがトップページです。主題も一覧表がありまして、どんどんブレイクダウンできる。そしてこれがいわゆるメタデータです。URLがあって、そこをクリックすると、直接該当するリソースにジャンプする。もちろんキーワードで検索することもできまして、例えば「遺伝子」と入れて、検索すると、こういった形で遺伝子に関連するサイトの一覧が出てくる。これが今のところ日本の代表的なサブジェクト・ゲートウェイの例です。

あと、それから理工学系、科学技術に特化したゲートウェイとしては、東京工業大学のこういうサービス(理工学系ネットワークリソース検索)もあります。それから東京学芸大学、厳密にはサブジェクト・ゲートウェイとは多分呼べないんだと思うんですけども、東京学芸大学のE-Topia、教育系電子情報ナビゲーション・システム、このなかにパスファインダーというのがありまして、これがなかなかよくできている。教育学系のインターネット上のリソースというのを幾つかのトピック毎に使いやすくまとめたものです。

こういったサブジェクト・ゲートウェイですとか、あるいは学芸大の例ですとパスファインダーと呼んでいるわけですが、こういったものを大学図書館が協力して幾つかで主題を分担してつくと、例えばYahooとかとはちょっと一味違った学術系の何かポータルみたいなものができるのではないかと期待されるわけでありまして。

続いて、学術機関リポジトリの話に移ります。学術機関リポジトリというのは、英語ではInstitutional Repositoryというふうに使われておりまして、それを仮にこう訳しているんですけど、大学ですとか、あるいは研究機関の知的な生産物を、それを蓄積して保存して、発信していくための電子保存書庫であると、そういうふうには定義されています。要するに学内の先生方ですとか、あるいは研究者が書いた論文とか、プレプリントとか、あるいは実験のデータですとか、学会で発表した資料とか、そういった学内の学術生産物を一カ所に集めてきて、それを組織化して、外に公開していこうと、そういう試みなわけです。まめな先生ですと、自分のホームページというのを立ち上げて、そこでいろいろ論文とかの研究成果を発信している先生方もいる。ですが、大半の先生方というのは、忙しくてそんなことをやっている暇がない。せっかくの貴重な研究成果も、パソコンのなかに仕舞い込まれてしまって、埋もれてしまう。そういった知的な生産物というのを、うまく引き出して、それを世の中に広く公開していくための仕組みと言えるかと思います。

まず、海外の事例を挙げておきますと、もう既にこういった大学がリポジトリというのを公開しております。一種のトレンドというか、海外の大学図書館ではInstitutional Repositoryを構築するのがブームのようになっておりまして、次々にいろいろな大学でリポジトリが構築されるようになってきております。

日本の現状を見てみますと、ご存じのように、昨年の3月にこういった答申(科学技術・

学術審議会「学術情報の流通基盤の充実について（審議のまとめ）」が出ている。そのなかで、大学図書館を中心として大学から発信されるさまざまな学術情報を一つの発信窓口を通して体系的に発信していくべきであると、そういう提言がなされているわけでありませぬ。つまり、大学図書館というのは、これまでのように学術情報の収集だけではなくて、これからは発信機能も担っていかねばいけぬ。特に学内で生産された情報の発信機能というのを担っていかねばいけぬ、そういうわけでありませぬ。それを受けるような形で、NIIのメタデータ・データベースの構築事業というのが昨年から開始されておりませぬ、この事業というのは、要するに大学内のホームページ上で公開されているさまざまな学術情報のメタデータを共同で入力していこうという、そういう事業なんです。その成果がこのJuNii(<http://ju.nii.ac.jp/>)というサイトで既に公開されておりませぬ。NIIを中心として、こういった情報発信のための取り組みというのがもう既に開始されているわけなんです、先ほど言った学術機関リポジトリというのは、まだ日本には誕生していない。何とかこういうものを作りたいなということで、千葉大では去年からこのリポジトリのプロトタイプ構築というのに取りかかっておりませぬ。

仕組みとしては、そう難しいものではなくて、学内の先生方にこういったいろいろな情報を、研究成果をリポジトリに投稿してもらおう。それに対して図書館員が書誌的なメタデータですとか、あるいはその他のいろいろな関連情報を付加して、最終的にリポジトリのなかに格納する。学内外の利用者の方は無料でそれを利用できると、こういった仕組みになっておりませぬ。まだプロトタイプの段階なんです、実際にどういったものかをご覧くださいませぬ。

千大リポジトリ管理システムとかという名前になっておりませぬ、まだ利用者用のインターフェースというのができてなくて、管理用の画面をごらんいただきます。ここでいろいろ検索ができるんですが、「土屋」というのは、あの有名な土屋先生です。「高木」というのは、あまり有名でないかな、図書館の世界では、やはり千葉大の文学部の先生なんですけれども、検索をすると、こういった形で両先生の研究成果が出てくる。例えば高木先生の分を見てみますと、こういうメタデータとともに、高木先生がお書きになったこういう論文のコンテンツそのものが表示される。コンテンツそのものと、それに対するメタデータがセットでリポジトリのなかに格納されている。コンテンツ自体もリポジトリのなかで長期保存していこうと、そういう考え方です。

直接先生方にコンテンツを投稿してもらおうという、基本的にはそういう考え方とっておりませぬ。これがメタデータを付与するための画面になるわけです。一次データ管理というのがありませぬ、あまり名前がよくないんですが、それはそれとして。例えば私が何か自分で書いたものをこのリポジトリに格納したい、投稿したいと想定します。ここに、例えば今日のオープンカレッジのスライドがあるわけです。それをアップロードする。これちょっと時間がかかるんで、しばらくお待ちいただきたいと思ひませぬ。今のスライドが、私のパソコンのなかにあるんですが、それを千葉大にあるリポジトリのサーバーに今送っている最中です。大学のなかでやったときはそんなに時間がかからなかったんですが、何かやっていることはやっているみたいで、（笑い）すみませぬ。アップロードが完了しましたということで、ここに入って、コピーというボタンを押すと、リポジトリのなかに格納されURLがこういった形で出てくる。あとはタイトルですとか、作成者ですとか、主題とか、概要の記述とか、そういったいわゆるメタデータを付与して行って、保存を押すと、これで今日のスライドがリポジトリの中に格納されたということになります。

これが、千葉大で今つくろうとしている千葉大の学術情報リポジトリのプロトタイプなんですけれども、これを本格的な学術機関リポジトリにしようとする、こういったいろいろな要件（スライド「IR構築のための要件」）が必要になってくる。将来的に各大学で、いろいろな大学、あるいは研究所でもいいんですが、そういったところで各大学ごとのリポジトリというのを立ち上げる。そのなかには要するにコンテンツと、それプラス、メタデータというのがそれぞれ格納されているわけなんです、そのメタデータをNIIが、OAI-PMH(Open Archives Initiative Protocol for Metadata Harvesting)というメタデー

タ・ハーベスティングのための標準的なプロトコルがあるんですが、そのプロトコルを使って刈り取ってくる。それを先ほどのNIIのメタデータ・データベースに格納する。そうすると、このNIIのメタデータ・データベースというのがいわば日本の全国のリポジトリみたいな、そういう役割を果たすことができるようになるわけでありませう。

ですから、大学図書館は学内の学術コンテンツを収集して、それを保存する。一方、NIIは各大学のリポジトリに対する統合的な検索窓口の役割を担う。そういう形で大学とNIIが相互補完的なシステムをつくることによって、大学からの情報発信機能というのが整備されるのではないかというふうに考えております。時間がもうあまりなくなってきました。

以上が、情報の発信者サイドに立った機能なんですが、今度は受信者側の機能ですね、本当はこっちの話をしたかったんですが、まず図書館ポータルのお話をします。図書館ポータルとは何か。一言で言うてしまうと、図書館が提供するさまざまな情報とか、あるいはサービスをワンストップで利用できるシステムである。図書館のホームページとどう違うのかという話なんですが、ホームページというのは、汎用的なものですから、学内外の利用者を網羅的に対象にするわけ。図書館ポータルと言うと、どちらかという学内の研究者とか、学生を対象にしている。内容についても図書館の一般的な情報提供というよりも、むしろ大学における教育とか、学習とか、研究の支援というのが中心になる。提供するコンテンツについても、学内限定のデータベースですとか、あるいは電子ジャーナルというコンテンツ、それが中心になってくるわけでありませう。図書館ポータルのイメージなんですが、まず利用者の皆さんがポータルに入ると、最初にログインというプロセスがある。ログインしてもらおうと、そのとき各ユーザーごとにいろいろなユーザーの身分ですとか、資格ですね、学生か研究者かという区分もあると思うんですが、あるいはそれぞれのユーザーの好みなんかがあるわけですが、それを蓄積したプロファイルというのを参照して、その人に応じた各種の検索ツールというのを画面上に用意してあげる。これを情報景観とか、あるいはインフォメーション・ランドスケープというふうに呼んでいる人もいます。もちろんこのインフォメーション・ランドスケープというのは、ユーザーごとに変わってくるわけですが、見え方が違ってきます。もちろんこの情報景観というのを自由にアレンジすることもできるわけですが、つまり、自分がいつもよく利用するようなデータベースをここに並べておいたりとか、よく見る電子ジャーナルを並べておくことができるわけでありませう。現状ですと、こういったデータベースを一つずつ検索したり、ブラウジングしたりしなければいけないんですが、それをワンストップ検索という統合的な仕組みを導入して、クロス検索してしまう。さらに、その検索結果には、リンク情報というのが設定されていて、それをたどって情報間を自由に行き来して、それから情報資源そのものにアクセスすることができる。これが図書館ポータルの基本的な機能なのかというふうに考えております。

さらに、ポータルにはいろいろな付加機能というか、サービスをつけ加えることができます。統合検索というのは、先ほど図で説明したとおりです。あと、個人ライブラリー機能というのがあって、これは自分だけのブックマークですとか、あるいは文献の一覧というのをすることができる。それから、図書館との間の何かインタラクティブな双方向的なサービスとしてILLの依頼ですとか、あるいは図書の予約とか、それから先ほど田村先生にお話していただきましたデジタル・レファレンスの口なんかもここに付けることができる。あともう一点、能動的サービスというのがあって、能動的サービスというのは何かというと、つまり、ユーザーが求めている情報だけを提供してあげるのではなくて、積極的に図書館側から利用者が必要とするのではないかと思われるような情報を提供してあげる。要するに、例えばこういう本を借りた人は、こういう本も借りていますよという、アマゾンドットコムなんか使おうと、よく出てきますよね。ちょっとおせっかいなサービス。ああいうサービスが可能になるのではないかというふうに考えられております。

海外の動向なんですが、ARLですね、北米の研究図書館協会で、こういうポータルのプロジェクトというのが立ち上がっております。そこでポータル機能に関する調査というのを

行っておりまして、その結果を見ると、まだアメリカでも本格的なそのポータルというのをつくっている大学図書館は少ないのかな。ポータルという用語の定義とか、あるいは機能についてもまだやはり図書館毎にかなりゆれがある、まだ流動的であるというふうな気がします。

それから、ARLのプロジェクトで、ここに書いてありますように、Fretwell-Downingという、図書館システムのベンダーなんですけど、そこがつくっているZPORTALという、図書館ポータルのパッケージを幾つかの図書館が試行的に利用して、それを評価しようという、そういう試みも行っております。

あと、海外の図書館で今流行っているのは、いわゆるマイライブラリーというものでありまして、これは先ほどちょっとお話しましたが、パーソナライズが可能な図書館Webのようなものでありまして、これが一つの流行になっている。マイライブラリーの事例については、この画面の一番下にリンク集がありますので、こういったものを参考にさせていただきたいと思います。

日本については、というか、アメリカと同様に、まだ本格的な図書館ポータルというのは多分できていないという気がします。ポータルの芽のようなものは幾つかある。それから、国内の図書館システムのベンダーも最近図書館ポータルのようなものに注目しているようでありまして、最近、富士通からこういった機能を備えたマイライブラリーというパッケージが発表されたようです。近々京大の図書館に入るといった話を聞きました。

いずれにしても、図書館ポータルというのは、やはり今後の図書館サービス、特に先ほど田村先生がお話になった、図書館のリモート・サービスにとって、多分中核となるシステムになるのではないかと考えております。ですから、大学図書館に共通する課題の一つとして何か標準的なポータルのモデルみたいなものをつくって、それを実際に大学図書館のサービスのなかに組み込んでいく、そういう方策についてこれからみんなで考えていかなければならないと思っております。

続いて、デジタル・レファレンスのお話ですが、これは省略します。

あと5番目の機能、今日お話したいと思っている最後の機能として、オンライン・チュートリアルというのがあります。これを簡単に取り上げておきたいと思います。ここで言うオンライン・チュートリアルというのは、いわゆる自学自習を目的とした一種のオンライン学術情報活用ガイドである。情報のリテラシー教育の支援のためのツールとして使われる。利用者の自学自習、セルフ・ラーニングに使うとか、あるいは図書館が主催する講習会とか、ガイダンスでこういったチュートリアルを活用する。さらにリテラシー教育を担当する図書館員の育成、養成のための教材としても利用できる。こういったものであります。実際に見てもらおうのが一番早いんですが、VTS(RDN Virtual Training Suite)というチュートリアルがあります。これは先ほどサブジェクト・ゲートウェイのところでもご紹介いたしましたが、イギリスのRDN(Resource Discovery Network)というところが提供しているんですが、60くらいの主題トピックのチュートリアルが用意されております。それぞれの主題ごとに構成というのが大体決まっています、テンプレートみたいなものに従ってつくられているんですが、ウエルカムがあって、スタートがあります。これはチュートリアルの使い方の説明です。その次にツアーというのがありまして、この主題、あるいはこのトピックに関連する代表的なインターネット上のサイトなんかでここで紹介されている。それから、ディスカバーというところに行くと、この主題に関する情報資源を探し出すための代表的な検索ツールですとか、あるいは検索テクニックなどがここで習得できるようになっている。それから、ジャッジというのがあるんですが、ジャッジというのは、見つけた情報資源の質を評価する、その方法をここで学ぶことができる。最後にプランということで、自分の学習とか、研究にインターネットを活用する上で具体的な戦略とか、その方法なんかでここで紹介されている。途中いろいろなクイズが挟み込まれていたりとか、あるいはリンクスバスケットなどもあって、チュートリアルのなかで見つけた、紹介されているURLとかを、ここに保存しておくことができる。自分用のバスケットになるわけなんですけど、こういった形でいろいろ工夫がこらされている。これも後でゆっくりとごら

んになっていただくと結構おもしろいです。

あと、テキサス大学のTILT、これも結構有名なチュートリアルだと思います。もう一つ、カナダのプリティッシュ・コロンビア大学図書館の例を挙げておきましたが、この大学は、WebCT(<http://www.webct.com/>)という、多分聞いたことある方たくさんいらっしゃると思うんですけども、e-ラーニングの構築システム、コース・マネジメント・システムが生まれた大学でありまして、図書館でもWebCTを使って、幾つかのチュートリアルというのをつくっているわけでありまして、ここでは、建築学を学ぶ学生のためのチュートリアルというのを挙げておきました。

日本の現状を見てみますと、東京大学の「ネットでアカデミック on Web」という自学自習用のコンテンツがあるんですが、やはり日本ではオンライン・チュートリアルというよりもオンライン・ガイドなんです。図書館の利用案内とか、オンライン・ガイドです。あるいはオンライン・ヘルプなのです。そのオンライン・ヘルプというの、例えばOPACとか、個々の出版社の電子ジャーナルとか、個々のデータベース単位のオンライン・ヘルプというの、幾つかの大学でも既に提供しているわけでありまして、そこまでなんです。

海外の例を見ると、全部主題単位なんですよ。サブジェクト単位で、情報の発見とか、評価とか、利用に至る、そういった一連のプロセスが習得できるような、そういう教材になっているんですが、日本の場合、そこまでいってないんです。ほとんど単発的なというか、リソース単位のオンライン・ヘルプにとどまっていると言えないのではないかと思います。

これも、主題ということになると、サブジェクト・ゲートウェイとも関連してきますが、幾つかの図書館で主題を分担して、何かある一定の枠組みに基づいたチュートリアルというのを共同でつくっていくと、それは大学図書館界にとって一つの財産になる。利用者にとってもそれは非常に便利なツールになってくるのではないかというふうに思うわけでありまして。

最後に、まとめというか、今後の電子図書館サービスを考える上での観点というか、それを申し上げたいと思います。つまり、インターネットの普及によって、今の図書館というのは、さまざまな商用サービスとの競合を迫られるようにやはりなっているのかなという気がします。例えばGoogleとか、Yahooとか、そういう検索エンジンがあるわけですが、図書館が用意しているOPACとか、あるいはデータベースとか、せっかく用意してあげているんですけども、利用者はそういうものを使わない。みんなGoogleを引いてそれで済ませてしまう、そういう利用者が増えている。図書館員自体もGoogleを引いて、それで済ませてしまうということがよくあると思うんですが。

先ほどポータルの話のところ、ARLのプロジェクトを紹介しましたが、やはりARLがなんであいうプロジェクトを始めたかということ、やはりGoogleに奪われてしまった利用者というのを今一度自分のところに、図書館のほうに呼び戻したいと、それがどうも一つの動機になっているというふうに聞いております。

質問回答サービスについても、いろいろあるんです、こういう商用的なものが。これはやはり図書館がやろうとしているデジタル・レファレンスと競合関係になっていくのではないか。あとアマゾンなどのオンライン書店もこれも一種の図書館の競争相手なのかな、競争相手と言っていいのかわからないんですが。

こういった商用サービスとの競争に勝ち残るにはどうしたらいいのか。競争に勝つ、別に勝つことはないのかな。やはり大学図書館によるサービスの差別化というのを考えていけないといけない。一つが、評価の確立した資料とか、情報に基づくサービスである。これはいいです。それから、専門家による支援が受けられる。専門家というのは、これはサブジェクト・ライブラリアンと書いてありますが、日本に本当のサブジェクト・ライブラリアンがいるのかいないのかという話はさて置き、一応専門家による支援が受けられるというのは売りにしなければならない。

あともう一つ忘れてはならないのは、サービスのハイブリッド化ということでありまして、やはり電子だけじゃないよ、今まで図書館が蓄積してきた紙媒体の貴重な情報がある。

それから、紙媒体の情報はこれからも図書館はずっと収集し続けていくわけですから、せっかく持っているそういう紙の資料と、それから電子の資料をうまく組み合わせて、それをサービスの売りにしていく。これはほかの商業的なサービスではなかなかできないことだと思うんです。というわけで、こういった点についてこれから意識しながら電子的なサービスというのを設計していかなければならないのかなというところで、私のお話は終わりたいと思うんですが。

実は、最後にネタを明かすのもなんですが、今日の私のお話は、国大図協の図書館高度情報化特別委員会ワーキンググループでの活動がもとになっております。ここにこのワーキンググループのサイトを挙げておきました。これは誰でもアクセスできます。このワーキンググループ自体はもう今年の3月に報告書を書いて活動を終了してしまっているんですけども、ここから報告書(「電子図書館の新たな潮流 情報発信者と利用者を結ぶ付加価値インターフェース (ワーキンググループ報告書 平成15年5月29日)」<http://wwsoc.nii.ac.jp/anul/Kdtk/Rep/73.pdf>)をダウンロードできるようになっていますので、ぜひ関心のある方はお帰りになってからご覧になっていただきたいと思います。

どうも、時間を超過してしまってすみませんでした。ご清聴をありがとうございました。